

連載

涌

わ き み ず

水

なまみ
生身を生きる

絶えたことのない湧水、
それを護るように立っている
宝生山再興以来、一〇〇年の風雪に
耐えた一本の杉の木、
私達はその縁に結ばれています。

「ん坊小人」こと
長崎県 円徳寺

山田恵仁

開・示・悟・入

法華経
方便品

なぜ仏様は私たちの世界に 現れられるのか

「卒寿を迎えました。元気でこの歳を生かして頂いているのは仏様のおかげです。」

と、本年五月十日兼儀校長先生ご夫妻が円徳寺にご参詣になりました。

エネルギー源の転換政策は不夜城を誇った産炭地の居住地域をも、すっかり一変させてしまったのです。山地に囲まれた田舎をむき出しにした風景は、石炭の産出のみに頼ってきた以外、何一つ別の産業を起こす余裕も、想いも無かったことを示しています。民族移動みたいに去っていった人たちの後は、ボタ山の点在のみが際だっていたのです。

この地に降って沸いたような工業高校の設置です。その設立委員長として一年間の汗を流され、昭和三十七年四

月初代校長として四十四歳で赴任なさったお方です。

文字通りの廃墟の地に屹立した新しい学校の建造物は、若者の未来を託した希望の姿です。

円徳寺より1kmそこそこの距離にあるその高校に採用頂いたのは、開校二年目の新任教師としてです。

明治期に寺号を称したとはいえ、炭鉱全盛時にあっても、旧地区に二軒のみの檀信徒数。その寺院の経営が曲がりなりにも維持できているのは、またこのお方のお陰に依るといっても過言ではありません。

当時の職員の平均年齢が二十八・八歳。開校したての校舎は増築中で、体育館もなく、授業をつぶしては、グラウンドの整地に生徒と一緒に汗を流して



たものです。若さに満ちた意気込みは、未完成の校舎、実習棟等が徐々に姿を現してくるに比して、生徒として、教師としての成長の証しみたいな気分に浸っていたものです。感性が衰えぬ時期での、この雰囲気です。善き人達との出会いは、その生涯における教育観、人生観すら決定づける程のもので

「学校を出たばかりで、人生経験も浅い教師に担任は任せられない。」との校長方針。様々な家庭から預かった成長過程で、情動の激しい時期での三年間。文字通り「ホームルーム」の担任こそ、教育の基幹なのです。ある時は強制し、別の場合には多様な生徒の喜怒哀楽に同化し得ることで、決して完成点のない教師としての確立をはかるのがその勤めです。生徒も同じく、若しは信、若しは謗、共に教育を成す」

「副担任でしよう。主担任もその案には反対しているのですよ。改めて、科（の職員）で寄り合って検討しましたが賛成できません。」放課後すぐからの生活指導委員会です。それが、なかなか結論に至らず、七時頃「ちゃん

ばん」を出席全教師に配食しての続行です。一旦休止して、その生徒が属する科の出席教師が意見をまとめて再開された折りの引用部分です。結局は最終バス（十時くらい）に間に合うようにして閉会となったのです。それからまた校長先生と二人での教育論議を、同じ席で十二時過ぎまで交わしたものです。私の主張通りに落ち着いたのですが、これは単に一例にすぎません。異なった意見を議することで、全員一致での結論を得ようと努める姿と、その為に時間を割いてのお互いの理解を深めあわせようとすると校長先生自身の深い教育者としての配慮だったと思えます。

翌日、職員朝会后、HRに担任が出かける前、すぐに私の前にこられて、「昨夜は私が間違っていました。生徒に接する機会を離れてしまつて思いが及ばなかったのです。」と、大きな声で頭を下げられるのです。何も間違つておられた訳ではありません。賛成意見の陳述もなく、長時間に亘った審議です。こんな言動をとられることで、全職員に対する、校長としての教育観を自ら「開き」、その在りようを「示し」、

反対意見だった人も「納得させ（悟）」、共に、これからも意見の異なりを含めて「教育の道を歩む（入）」、のを開示・悟・入されているのです。

このような姿勢が、例えば高校総体での入場行進に当たっては、優勝旗2本を翻しての堂々たるものとして現れるのです。

自身の高校教師としては、佐世保工業高校が振り出しで、佐世保空襲によって、校舎の全焼の災禍にあわられています。戦後故郷の口加高校に移られ、バレー部の監督としては、国体に数回出場され戦後の混乱期にあつて、若者への努力の成果を県下全般に示されています。県の指導主事、高島高校分校校長を経て、佐世保工業に再び教頭として戻つてこられたのです。次いで鹿町工業高校の校長となられた四十四歳は、県下の高校校長としての若年記録ではないかと私案しています。当時の県の教育長の方が「四十五歳で一番若くして」と聞いていたものだから。生涯の教育観として語られたのは「教育は生徒あつての学校であり、社会である。個性を生かし、生徒と共にある時間を多く過ごしたい。基礎学習

は反復練習にある」です。これはまた、最後の現場勤務となられた古巣の佐世保工業高校校長としても、県北勢として初めての甲子園出場を果たされ、春夏合わせての七回の出場として稔^みっているのです。

昭和六十二年春七十歳にして叙勲、勲四等瑞宝章を受けられています。

現在なお文化協会の顧問として地方文化の育成に精を出されていられるのです。米寿時には、居住地区（諫早市多良見町）で絵の個展を開かれ、売上

金の全てを地方文化育成の資金として寄進なさっています。

昨年、長崎市在住の娘さんご夫妻を前にして、奥様共々「元気なうちに頼んでおきたいことがあります。私の場合には葬式にしないで、入門式として下さい。それをお祝いとして欲しいのです。」

「判りました。御説の通り、円徳寺本堂で戒名を授け、出家得度の式を師弟（愚息）共に執^とり行わせて頂きます。が、こんな相談を残される私たちが受

けること自体、ひどく悲しいのです。祝宴だけはできません。」

と応じたものです。墓地は故郷の口之津町に既に求めていられるのです。想いはその念と共に遠いほど深まる、と言います。

「円徳寺本堂の建立に微力ながら、お手伝いできて、こんなに有り難いことはありません。」と、おっしゃっていられるのですから。

平成十七年十月十二日記

平成17年11月10日、円徳寺発行
『杉の子』第22号より

